慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リカルドオの地代論（四）
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.5 (1924. 5) ,p.667(47)- 679(59)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240501-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

して生産者は直接消費者に販賣しつゝあるのである。果して然らば所謂直接配給とは此の意味に於て始めて可能となるものであると云ひ得るのである。而してかゝる配給組織は或は將來起り得ん社會主義的經濟社會の配給組織の狀態を暗示するものではあるまいか。けれども現在社會に於てはかゝる場合は殆んど獨占的地位を有する貨物に限られるのであつて、代用品の存在する場合には特に外國品の競爭ある場合には獨立商人の辯舌よく消費者を動かすことあるを以て、かかる形勢が如何なる程度迄今後實際に行はるゝか明かではない。

要之觀念は容易に之を一般に及ぼすことが、出來るが、物質は之を動かすには特別の配給組織を必要とするものである。而して其爲に要する器械化せられたる配給組織は長く其存在を維持するものであらう。

「社會的勞働組織」を本誌で發表して以來既に一年に垂んとしあるも而して余は太古より最近世に至る迄の配給組織の變化を一通り叙述し更に將來に於ける其變革の趨勢を明かにしたつもりである。只最後の最近の部分は論じて甚だ盡さざる所あけるれど、發表以來餘りに長き間に亘れるが故に一先づ茲に筆を擱き、其足らざる所は他日を待つて之を補はんことを期する。（一九二四——三——一五）

リカルドオの地代論（四）

小泉信三

十五

一國の人口と資本との增加に連れて、利潤率減少して地代は騰貴すること上述の如くなりとせば、人口國富の增進已まざる時は、一方に於て地代は其絕對額に於ても其の投下資本に對する比例に於ても俱に增進すべしと雖も、利潤に至つては早晩比例的にも絕對的にも減少する時の到來すべきの理なり。斯の如くにして、利潤の喪ふ所は皆これ地代の得る所なり、茲に至りてRicardoはMalthusの地代論に容認し難きものあることを感ず。既に前に引ける書簡中にもRicardoはMalthusの著作に讃辭を呈したる後、而かも猶ほ後者の所説に對して必しも異見なきにあらざることを謂ひて、特に「地代は如何なる場合にも富の創造にあらず。それは常に既に造出されたる富の一部分なる……」ことを説けるなり（Letters to Malthus p. 59）。

Malthus と Ricardo との所説には果して如何なる差違あるか。

Malthus に據れば、地代の直接原因は土地生産物の市場に於ける賣價が其生産費に超過すること是なり（The Nature and Progress of Rent, p. 2）。彼れは更に斯る價格の超過あるの原因を覓めて三を得たり。（一）土地に其土地を耕す者を養ふ以上の生産物を出すの力あること（the quality of the earth by which it can be made to yield a greater portion of the necessaries of life than is required for the maintenance of the persons employed on the land.）、（二）生活必需品には其自體に對する需要を造出すの特質あること、換言すれば、生産せられたる必需品量に比例して需要者を增加せしむること、及び（三）最も肥沃なる土地の比較的稀少なること是なり。此三原因中第三のものに就て Malthus が説く所は Ricardo の地代説と甚だ相近し。即ち謂へらく、社會發達の初期、又は古き社會の知識と資本とが新鮮肥沃の土地の上に使用せらるゝ時は、土地の餘剩産出力は主として破格なる高利潤と高賃銀とに現れて、地代の形に於て現るゝこと尠なし。沃地豐富にして人の隨意之を求め得べき狀態の繼續する限り、何人も敢て、地主に地代を納付せざるべきこと勿論なり。然れども此狀態の繼續することは、自然の法則、大地の限界及び性質と相兩立せず。地味と位置との異同差別は必然凡ての國に存せざるべからず。一切の土地は悉く最も肥沃の地たること能はず。一切の位置は最も河川と市場とに近きものなること能はず。然るに自然的豐度最も高く、位置の便利最も大なる土地に投用し得べき程度を超ゆる資本の蓄積は、必然利潤を下降せしめざることを得ず」と（ibid, p. 17.）。たゞ Ricardo は賃銀の下落に依て得るところあるものは利潤の外に存せざることを力説する「予を以て見れば、そは（賃銀の下落又は農業上の改良）たゞ利潤を增加せしむるに過ぎざるが如し」（Works p. 372 n.）に反し、Malthus は併せて人口過增の傾向に因る賃銀の低落も亦地代を發生增加せしむる原因たることを認むるの相違あるのみ。（p. 17）

然るに Malthus が遙かに重きを措くところは第一第二の原因にあり。即ち第一の原因に就ては、その「地代存在の爲め絶對的に必要にして、若し之なき時は如何なる程度の稀少も獨占」も地代として現るべき生産費を超過する價格の餘剩を産すること能はざるのみならず、又「高利潤の形に於ける土地の實質的餘剩生産物」も存在することなしと謂ひ（p. 9）、第二の原因に就ては、若し生活必需品に彼の特質な

からんには「一國の生産物如何に豐富ならんも、其人口は靜止の狀に止まるべく、此豐富は需要の此に比例するものなく、而して斯る事情の下に當然起るべき穀物貨銀（corn price of labour）の甚だ高率なることを以てする時は原生産物の價格を、製造品の價格と同じく、生産費まで下降せしむべし」と謂ひ、更に詳說甚だ力めて、此特質を有する點に於て土地は「人間の知れる如何なる機械とも根本的に異なれり」。「生活必需品の生産費を超過する高價格の原因は寧ろ之を其稀少よりは其豐富に覓むべし」。一般獨占的貨物にありては、需要は外在的（exterior to）なるに反し、生活必需品の生産に於ては……需要は生産物其者に由て定まる」。等の言をなせり。（pp. 10, 11, 14. Adam Smith に是と近似の思想あることは既に前に述べたり。本誌第十八卷第一號五二頁參照）

Malthus が特に上記の點を力說したるは、地代を以て土地の獨占より生ずるものと爲す學說に對して地代を辯護せんと欲するに出でたり。論する所は地代は果して新なる富の創造を意味するや、將た既存の富の移轉に過ぎざるやの問題是なり。Malthus の目に就中地代を過すること最酷なるものとして映じたるは、Buchanan が其校訂に係る「國富論」の註解の中に述べて、地代を以て有害なる獨占より生じ、又消費者より奪ひたるものを地主に與ふるものと認めたる說なり（Wealth of Nations p. 6）。即ち謂はく「經濟學者（フィジオクラアト）が由て以て農業の效益を測定せる純餘剩は、其生産物の高價格より生ずること明白なり。此價格は、之を受くる地主には如何に有利なるも、之を支拂ふ消費者に取りては何等の利益にあらざること確實なり。農産物にしてより低廉の價格を以て賣却せられんか、耕作費を支辨したる後に同額の純餘剩剩さるることなかるべしと雖も、農業の一般在貨に寄與することは依然同一なるべく、たゞ異なる所は、前に地主が社會を犧牲にして、高價格に由て富めるが如く、今社會が地主を犧牲にして廉價格に由つて利益すべきこと是のみ。地代又は純餘剩の由て生ずる高價格は、一方賣るべき農産物を有する地主を富ましむると同時に、一方同一比例を以て其購買者たるものゝ富を減少せしむ。此故に地主の地代を目するに國富の純增加を以てするは、全然不精確なり」（vol. IV. p. 134）。彼れは又租稅問題に關聯して、農産物の高價格は之を受くるものには有利なるも、之を支拂ふものには同一比例に於て有害なることを謂へる後、附

加して「是を以て觀れば、問題の純餘剰は收入の一階級より別の階級に移されたるものに過ぎざるを以て、社會の在貨に對する一般的追加と成ることを得るものにあらず、又その單に斯の如く收得者を變ふるの事情のみよりして、租稅の納付に充つべき何等の基金生じ得るものにあらざること明白なり。土地生産物の代價を支拂ふべき收入は、既に此生産物を購入するものゝ手中に存するなり。又假に生活資料の價格低廉なりしとするも、そは依然として彼等が手中に存すべく、其手中に於て、同じく之を課稅の用に充つべきことは、その價格騰貴に依て地主に移されたる場合と毫も異なることなし」と謂へるなり (vol. III p. 272)。

Malthus は此説を失當なりとし、土地産物の高價格、從つて地代が、其本質、其起原及び之を支配する法則に於て、通常獨占物の高價格と本質的に異なる所あるを示さんが爲め、上記の三原因を擧げたるなり。故に第三の原因として土地の稀少を擧げたりと雖も、彼れは「……土地の稀少は決して單獨に上記の結果を生ずる（地代となるべき餘剰を生ずる）に足らざる」ことを認めたるなり (p. 8)。故に Malthus の地代論には地代を以て天惠に基づくものとなし、又此を單純なる收入の移轉にあらずして、富の創造增加を意味するものと見るの一面あるは當然の理なり。故に曰く、「果して然りとせば、生活必需品の價格は果して之を通常の獨占原則に由て左右せらるゝものと認むることを得べきや。……果して Buchanan 氏と共に、之を國富に對する追加にあらずして、獨り地主にのみ有利にして、消費者には比例的に有害なる價値の移轉に過ぎざるものと認め得べきや。反對にそは神與に係る至貴至重なる土地の性質、即ち能く之を耕すに必要なる所以上の人を養ひ得るの性質、を明示するものにはあらざるか。そは實に有ゆる權力と享樂との源泉なりと正稱せられ、それなくんば、啻に個々人を向上せしめ、品位あらしむるに止まらず、又其惠澤を全民衆の間に及ぼすところの都市なく、陸海軍なく、藝術なく、學問なく、精巧なる工業製造品、諸外國の便宜品、餐澤品、彼の教養あり洗練ある社會の如何なるものもなかるべき、彼の土地よりの餘剰生産物の一部分（その絶對的に必要の部分たること は後段に至つて見るべし）にはあらざるか」と (pp. 16-7)。而して此の餘剰生産物を指すに彼れは又此の「寛大なる攝理の賜」(this bountiful gift of providence) の語を用ゐたり (p. 17)。Adam Smith が恐らくフィジオクラアトに得たるものと推測すべき、農業

に於ては「自然は人間と倶に勞作す」との思想は、猶ほ茲に Malthus の繼承する所となれるを見るべし。彼は後に其經濟原論の一節（一三七頁）に明かに「Quesnay 學派の經濟學者が地代の本質に就て表白せる見解の或ものは、予を以て見れば、全然當を得たり」と言明したるなり。

Ricardo が其書簡中に謂へる所を再び反覆して、「……地代は有ゆる場合に於て、前に土地上に於て獲得せられたる利潤の一部なり。そは斷じて新なる收入の創造にあらずして、常に新に造出されたる收入の一部分なり」と謂ひたるは（p. 375）、明に此思想と相絶てるものなり。或方面より見れば、Malthus と Ricardo との所說は必しも其用語の上に於けるが如く相距たることなしと謂ひ難きにあらず。Ricado は肥沃なる土地に限あるが爲めに始めて地代の生ずることを力說すと雖も、その地代の生ずるは比較的優良の地に於ての事なるを以て、固より地代は肥沃なる土地のそしきが爲めに生ずと謂ふべきなりと雖も、反面より見れば、また地代は比較的優良の地あるが爲めに生ずと謂ひて、必しも不可なるにあらず。而して既に地代が生產費に對する生產額の過剩より成るものなりとせば、地代あらんが爲めには土地に其の耕作者を養ふ以上の產出力なかるべからざるは當然の理なり。故に Ricardo は Malthus の力說する地代發生の第一原因を決して否認するものにあらずと雖も、たゞ Malthus が地代が單に收入の移轉たるに止まるものにあらずして、新しき收入、又は富の創造を意味するものなりと說くに反し、Ricardo が地代の前に利潤たりし餘剩生產物耕作者扶持以上の）の蠶食に由てのみ發生することを斷定言明する點に於て、兩者間に到底相容れ難きもの存することは否認すべからざる所なり。（Diehl, Erläuterungen Bd. I. S. 421）。

十六

以上 Ricardo は、穀物の價値又は價格を姑らく度外して、地主資本家及び勞働者に收得せらるべき生產物量の增減を論じたり。今生產物の價格を顧慮するも、上に述べたる所の理は異なることなし。たゞ物の「交換價値は究局其生產の難易の左右する所」なるを以て、劣等地耕作せられて、地主が收むる所の穀物地代額增加する時は、即ち又穀物の價値騰貴せる時にして、地主は其所得穀物量の增加と其價値騰貴との二重の利益を收め、爲めに人口資本の增加の全社會中獨り地主階級のみ

に惠福あるの理は愈々顯著なることを得るのみ。「嘗に地位の境遇は(蓄積の結果たる食物獲得の困難增進の爲め)其の收むる所の土地生產物量の增加に依つても改善せらるゝのみならず、又此量の交換價値增進に依つても亦改善せらる」。假りに其地代穀十四クオタアより二十八クオタアに增加したりとせば、此の二十八クオタアは前の十四クオタアよりも倍量以上の貨物と交換せられ得べきを以て、其所得は前の二倍以上たるべし。「地代は貨幣を以て約定せられ且つ納付せらるるを以て、彼れは此の假想せられたる狀態の下に於てはその前の貨幣地代の二倍以上を收むべし」。同一の理に由て地代下降する時は地主は二重の損失を受く。農業家に至つては地主と同じく其の收むる穀物の價値騰貴に依つて利益すべしと雖も、一方穀物の低廉なる時は即ちその收得量大なる時なるを以て、その喪ふ所はその得る所に依つて償はるべきなり。故に曰く、「地主の利害は常に社會中自餘各階級の利害と相反す。爾餘の者は皆な食料獲得の低廉に依りて大に利益するものなるに、地主の狀態は終に食物の稀少不廉なる時の如く繁榮なることあらざるなり」と(p. 378)。

「事物自然の行路の結果」として地代が騰貴し利潤が下落するは Ricardo 之を已むことを得ざるものと認む(p. 378)。たゞ彼れは穀物關稅の如き人爲的方法に由て社會全員の利害を牲にして地主の特殊利益が伸長せらるゝを默過すること能はずして、「一特殊階級の利害尊重をして、國富と人口との增進を阻止せしむること を大に遺憾とする」ものなり(p. 390)。然れども右に所謂「社會中爾餘各階級の利害」は何ぞと云ふに、Ricardo が暗默の間資本家(利潤收得)階級を以て其代表者たらしめんとするの傾あることは之を爭ふ可からず。食物の低廉は勞働者階級の生活を輕易にすべきこと勿論なりと雖も上方述べたる如く、Ricardo は常に食物の低廉と賃銀の低廉とを殆ど同義に解釋す。故に彼れが食物の低廉を望むは爲めに勞働者の生活に餘裕を生ずることあるが爲めにならずして、賃銀の低落を來たすことあるが爲めに外ならざるなり。されば Ricardo は地主階級の利害を抑へて社會全體の利害を揚げざる可からずと謂ふと雖も、勞働者の利害は斯の如く長期に亘りて之を見る時は食物生產の難易に由りて殆ど得喪する處なきものなるを以て、彼れが地主の利害に對立せしむる所謂全體の利益は畢竟資本家階級の利益に外な

らざることに歸着す。何故に地主階級よりも資本家階級の利益を重んせざる可からざるかに就ては、此階級の繁榮は資本の蓄積と生產的產業の奬勵とに導くものと解せるが如き言ある（p. 388.）の外 Influence etc. 中には幾ど其說明と目すべきものなし。Ricardo は利潤增加の喜ぶべく、其減少の悲しむべきことを幾ど證明を俟たざる自明の理と解したるもゝ如し。此點に於て Ricardo は社會全體の利害と各階級の利害とを見るに其の city man の眼光を以てしたりと謂ふ批評を恐らく免るゝこと能はざるものならん。

食料供給上に外國に倚賴するの危險は穀物自由貿易論に對する最も有力の反對論據たるべきものならん。然れども Ricardo の見る所を以てすれば、此理由も亦た甚だ重を措くには足らず。蓋し一國の穀物自由輸入の政策確立せらるゝ時は、穀產國に於ては資本は此需要に應ずる爲めに土地の開墾改良の爲めに投下せらるゝを以て、輸出を持續するは輸出國自身の利益とする所にして、重大なる損失を冒すにあらずんば、到底之を中絕せしむること能はざるを以てなり。曰く「我邦にして規則正しき輸入國となりて、外國人にして我邦市場の需要に信賴することを得るに至らんか、穀產國に於ては輸出の目的を以て遙に廣大の地積新に耕作せらるべし。英國內に於て僅に數週內に消費せらるゝ穀物價額を考慮する時は、大陸の我等に供給する穀物量にして多少論ずるに足るものあらんか、輸出貿易は慘害最も廣く且つ甚しき商業上の窮厄を伴ふことなくしては之を中止すること能はざるべし。此窮厄は如何なる君主も、君主の同盟も之を其人民に加ふることを欲せざるべく、假に之を欲するも、そは恐らく如何なる人民も敢て服從せざる方策たるべし。土地に投せらるべき莫大の資本は即時に之を回收すること能はず。又斯る事情の下に於ては莫大の損失なくして回收すること能はざるべし。加之、其市場に於ける穀物の過剩は、其全供給量に影響を及して其價値を法外に下落せしむ。又有ゆる商業企業に缺く可からざる收益の缺如は、倒產相踵の光景を現出すべく、一國にして假令努めて之に耐ふるも、能く他國と戰爭して勝利を博するの希望は爲めに絕無なるに至らん」(p. 382)。「Malthus は〔自由〕輸入が此國の確定政策となれる曉に外國に產せらるべき穀物量の增加を充分斟酌せざるの憾みあり」と(p. 383)。Influence etc. 中述ぶる所の Ricardo の分配理論及び非輸入制限論は略ぼ是を以て盡きたり。（未完）